深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　「大戦争」が始まる前と後で、「私」の心情にはどのような変化が生まれているのか、考えてみよう。

【答】　「私」はもともと周囲との儀礼的なつきあいに違和感を持っており、家にいる母と暗黙のうちに成り立つ親密な関係性を大切にしながら暮らしていたが、「大戦争」が始まることでやるべきことを画一化していく周囲の雰囲気に、不安と孤独を感じるようになってきていると思われる。

2　小説内で「私」が提示している「待つ」対象を順番に抜き出し、その変化について考えてみよう。

【答】　最初は「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）や「誰か」（二一〇・7）というように大まかに人間を指していたが、「人間でないかもしれない」（二一〇・13）とも述べる。しかし戦争状態になってそれまでの母娘での生活に自信を失った後は、「どなたか」（二一二・5）が現れたら「その人に私の命を差し上げよう」（二一二・7）と思いもする。一度は「はっきりした形のもの」（二一三・2）ではないと打ち明け、続けて、想像上の「笑って私に声をかける」「あなた」（二一三・4）も否定する。「旦那さま」、「恋人」（二一三・6）と、制度に則った婚姻関係から私的な関係性に移り、さらに男女関係から同性を含めた「友達」（二一三・7）となる。そして人同士の関係性から、欲望の象徴物である「お金」（二一三・7）に、さらには現実世界からは離れた「亡霊」（二一三・7）さえ登場する。最後には、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）という、「私」が待つことで感じていく雰囲気へと向かい、「春のようなもの」（二一三・8～9）、「青葉」、「五月」、「麦畑を流れる清水」（二一三・9）と列挙しては否定していく。結局は、何か分からないまま待つことで「胸を躍らせ」ている「私」の態度を前景化していき、そのように具体的な対象を示せない「私」への連帯を、「あなた」に求める構図を描いていく。

3　第四段落の「あなた」と第五段落の「あなた」が指す内容の違いについて考えてみよう。

【答】　第四段落では、私に声をかけるかもしれない人物である具体的な「誰か」に向けた否定だが、第五段落では、「私」が待ちながら心躍らせている何かであると共に、本作を読んできた読者に「私」のような存在を忘れないでほしいという訴えかけにもなっている。

言葉と表現の解答例

1　「私」が直前の発言を否定する表現や、反復される「…ない」という表現を抜き出し、その多様な否定的表現がもたらす

効果について考えてみよう。

【答】　例えば「ない」およびその連用形の「なく」を抜き出すと、以下のようになる。

「人間でないかもしれない」（二一〇・12）、「などと言いたくもない挨拶を」（二一一・2）、「世界中にいないような」（二一一・3）、「嫌で嫌でたならなくなります」（二一一・6）、「よほどのことでもない限り」（二一一・8）、「ちっとも落ち着かなく」（二一一・16）、「黙って座っていられない思い」（二一二・3）、「現れたときにはしかたがない」（二一二・6）、「何だか頼りない気持ち」（二一二・10）、「ねらっているのかもしれない」（二一二・15）、「はっきりした形のものは何もない」（二一三・1）、「あなたではない」（二一三・5～6）、「何だか、分からない」（二一三・8）、「あれでもない、これでもない」（二一三・11）、「私を忘れないでくださいませ」（二一三・12）

「ない」という同じ響きで、形容詞、形容詞の一部、助動詞を含むことになる。否定から不確実な判断など多様な意味があるが、対象のイメージを読者に想起させてはずらしていくことで、「私」の気持ちや価値観の揺れ動きを巧みに表現している。さらに「いいえ」（二一〇・12、二一一・1）を繰り返したり、「違う」（二一三・5）と「違います」（二一三・5～6）を重ねたりと、打ち消し表現を文章全体に溶け込ませることで、あたかも聞き手の「あなた」に対して言葉を選びながら、待つことの意味を探っているようにも捉えられる。

2　改行が少なく、長い文章と短い文章が交互に繰り返されているが、その効果について考えてみよう。

【答】　例：「私」がとめどなく語ったりしているように読めるし、「私」の意識の流れをそのまま写しているような印象も生まれる。何かを待っていることを「私」が他者に伝えるための意識の整理に時間がかかったり、言葉に混乱や逡巡が含まれることを表すような効果もある。

言語活動の解答例

1　時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、考えてみよう。

【答】時代状況：「大戦争が始まって、周囲がいよいよひどく緊張してまいりましてからは」（二一一・11～13）、「大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて」（二一二・13）

テーマとの関わり：「大戦争」は人々を戦時体制へと動員し、男性を戦地へ、女性は〈報国〉や〈銃後〉の担い手として、それぞれの役割を強いていった。「私」の「待つ」という姿勢は、そうした時代が求める生き方とは異なる生き方（言葉にできない何かに希望を託して「待つ」こと）を選んだことへの決意表明といえる。

【ポイント】　「大戦争」が始まった時期に駅で何かを待つ「二十歳の娘」（二一三・13）を語り手にすることに注目したい。同世代の男性は戦時下において、次々と兵士として駅で見送られ戦場

へと向かっていく。一方、女性は「銃後」を守る存在として、戦時色の強いジャーナリズムなどでも取り上げられて一義的な主体化を強いられていくことには触れたいところである。そうした戦時状態の只中で、到来していない何かを待ち続けるという「私」の態度へと焦点を絞り、「待つ」というタイトルになっている意味について考えてみたい。

2　「私」が何を待っているかが明確でないのはなぜか、「私」の気持ちと、作者の立場の両面から考えてみよう。

【答】　「私」の側から考えれば、待っているものが何かということよりも、戦時体制に順応していく周囲との違和を示すものとして希望を込めた「待つ」という姿勢こそが必要だから。

「作家の立場」としては、「待つ」内容を具体的に書いても軍部の検閲や出版社の自己検閲によって削除や書き直しを命じられる可能性がある。それならば、具体的に書き記すよりも、戦時下において「待つ」とはどのような意味を持つのか、読者の側にほのめかし、委ねることに意味があるから。

【ポイント】　「私」の側から考えれば、多くの人々が待っているものを具体的に列挙することはできても、だからといって、「私」の心に揺曳する微かな希望のような何かを、そうした限定された対象へと簡単には置き換えたくはない。「私」には、戦時下においては周囲から「不埒」に捉えられてしまうかもしれない危険性を知った上で、それでもなお、違和を表明して自分自身の思いを大切にすることこそが重要である。

作者の立場から考えれば、戦時下、軍部からの検閲や出版社の自己検閲等によって書き表しにくかった主張を、読者にほのめかしながら伝えることができる方法として、戦時体制の片隅に生きる「私」を語り手とする一人称小説が有効であると判断したのではないかと考えることができる。

（井原あや）